

江戸川学園の母 その生涯と足跡

江戸川学園の創始者である木内きぬ先生が66歳の人生に幕を閉じた昭和41年、当時の江戸川学園新聞編集部が多くのの方々にお話を伺いその生涯を振り返った記事が「江戸川学園の母 その生涯と足跡」です。原文のまま連載します。

生立ち

先生は明治三十三年九月三十日千葉県香取郡大須賀村（現大栄町）伊能の長興院と言うお寺さんの長女として生まれました。父は原田顕光さん、母はまささんといひます。当時はお寺さんと言うと地方では裕福な生活を送って居り、先生も寺男や女中さんにかしずかれながら育ちました。

幼少の頃の先生は両親の愛を一身に受け、我儘いっぱい生活を送られて居た。とにかくオキャンでお転婆、近所の野山を裸足で駆廻って居た。当時先生の特技は木登りと駆けっこで、庭の真中にある榎(まき)の木や山門などの高い処迄、登っては両親を困らせました。

村の尋常小学校二年の時、後年夫君となった栄三郎先生に教えを受けて居るといことは人生の縁(えにし)であろうか。その時、きぬ先生は級長でしたが、背が低いため椅子の上に乗し、クラスの号令をかけていました。

娘時代

成人するに随って、書画・文芸に興味を持ち、特に与謝野晶子に憧れて屋根裏部屋（納屋のことらしい）で文学書を読み漁（あさ）って居た。いっばしの文学

少女気取りで、遠くローマの地へ行きたいと夢見て居た。この頃から大須賀村の三小町として、その美しさは近隣に聞えが高く、多くの男性の憧れの的(まと)であった。

紫の袴と頭髪に結んだ大きなりボンはこの三才媛(きぬ・いと・ぬい)の三人)だけに認められた服装であった。

佐原の女学校を卒業すると村の小学校に代用教員として奉職したが、この頃は、護身用に針を一本身に付けて居ただけで、自分の荷物を持ったことがなく、爺やが後から荷物を持って従い、授業が終るのを待って、また帰りに荷物を持って寺に帰った。

時には通勤途上、大須賀農学校の生徒達が、うら若いきぬ先生に対して、直立不動の姿勢で「敬礼」と掛声をして挙手の礼をされ、何度も赤面されたという。そしてこの頃は自分のことも女中さん任せで不自由ない生活を送って居ました。

結婚

きぬ先生は村の小学校教員をしていた頃、栄三郎先生は東京の師範学校在学中で、夏休には郷里へ帰省し、母校である村の小学校へ立寄り、そこで改めて、きぬ先生と知り合ったようです。きぬ先生はこの頃から他人の洗濯物もするように

なり、娘らしさが増して来たのです。栄三郎先生は同じ村伊能の貧農の息子で、栄三郎先生の兄がきぬ先生の家へ結婚の申込みをした時、きぬ先生の御両親は「顔を洗って出直して来い」と身分の相違を指摘され、相手にされなかった。そこできぬ先生は両親の賛成を得られぬまま、大正七年伊能より上京し、東京田端で新家庭を持った。郷里では栄三郎先生の兄がきぬ先生の御両親へ毎日説得に行きました。一方、きぬ先生の親友の一人、斎藤さんもわが事のようにきぬ先生の実家へ許しを願いに行かれました。又栄三郎、きぬ両先生は裸一貫で上京して来たため、苦難の連続でしたが、それを乗り越え、独立独歩自らの生活を築き、その甲斐がありその後、勘当が許されました。

(昭和41年2月19日付「江戸川学園新聞第84号」転載)



学長のカレータイム ~「辛口(意見)甘口(意見)どんとこい」~

「学生の生の声を聞き、更に充実した学生生活を送って欲しい。」と、昨年5月から小口学長は学生たちとのカレータイムを始めました。平成28年度は人間心理学科5名、現代社会学科5名、経営社会学科10名、マス・コミュニケーション学科6名、情報文化学科12名、こどもコミュニケーション学科12名、研究生1名の計51名が参加しました。

お昼休み、大勢の学生でにぎわう学生食堂でカレーを食べながら、趣味やサークル活動、地域自慢等の話題で盛り上がり、学長だけでなく参加した学生も、好奇心をくすぐられるような話題が出る一方で、「朝のスクールバスの本数を増やしてほしい」「学生組織が自由に使えるような部屋があるといい」「学内にATMがほしい」「実験室を充実させてほしい」等、学生ならではの意見もあり、学長と学生が江戸川大学を良くするにはどうすればいいのかと真剣に語る場面もありました。

本学をより良い大学にするために、辛くもよし、甘くもよしの学生の意見を学長はこれからも求め続けます。



編集後記

あまり知られていない江戸川学園創始者の物語を今号から連載します。副学長の下平先生から大変貴重なものだから大事に扱うようにいただいた創生期の江戸川学園新聞は教職員や生徒の方々の活き活きとした姿が描かれていました。そのなかに江戸川学園の母と慕われた木内きぬ先生の生涯がまとめられており、それはそのまま江戸川学園の物語でした。私学の存在価値が問われる今、建学の精神や教育理念が尊ばれ、再確認する時期にきています。江戸川学園創始者の思いは今に脈々と受け継がれており、創生記の物語を読むことは自分たちの今を理解することに役立ちます。どうぞお楽しみください。

江戸川大学学報

2017年2月号 第39号

Vol.15 No.2 平成29年2月1日発行

発行 江戸川大学 事務局

〒270-0198 千葉県流山市駒木474

TEL.04-7152-0661